

演題概要

A 1 大学水泳授業における着衣泳指導カリキュラムの再考

○目黒拓也（日本大学大学院）、鈴木淳也（日本大学）、野口智博（日本大学）

N大学体育学科では、長年水泳授業の中で、着衣泳の指導を実施してきた。しかしながら、旧カリキュラムは、歩行、移動、脱衣と着衣状態で水中を動き、どのような移動手段が有効なのかを体験する内容が中心であった。新カリキュラムは、水難学会で推奨している自己保全能力を高める指導内容を導入し、より安全かつ効率の良い動作の獲得や災害時に対応できる能力を身に付けることを目的としている。これまでの着衣泳指導カリキュラムの変遷ならびに今後、教職養成大学としてどのような内容を学生へ提供していくべきか考察したい。

A 2 着衣泳実践の課題解決としての授業展開

○金井茂夫（玉川大学）、鈴木淳也（日本大学）、野口智弘（日本大学） 小林潤（玉川学園）

玉川学園では小学校1年生から5年生まで各学年で着衣泳の授業実践を行ってきている。特に5年生では4回の授業を着衣泳に当てている。平成23年度と平成24年度の合計8回の授業から様々な課題が明確となった。それらの課題を解消するための具体的な提案をして行く。

A 3 講習会の感想文を絵日記形式で書いてもらうこと

○宮鹿野充（裾野市消防本部）、安行由美子（関東甲信地区着衣泳指導員）、金子満（さいたま市消防局）

講習会後のアンケート調査を記述式や選択式から、文字を読み書きできない子でも感想を表現できる絵日記式の感想文に変更した。これにより一番印象に残ったことを即座に把握できる。感想文をスキャナーに取り込み、原本を持ち帰ってもらう事で家庭での話題の材料となる。また学校への提出物とできる効果もある。

B 1 流水下における着衣泳指導プログラムの策定結果の解析

○新西 道浩（株式会社 コナミスポーツ&ライフ）

平成24年度水難学会科学研究費助成金研究において、夏季に和歌山県田辺市で実施した、「流水下における着衣泳指導プログラムの策定」について報告する。河川において筏を流し、小学生10名の被験者が様々なパターンで筏に乗り上がる実験を行ったが、成功する被験者において一定の規則が認められた。またこの科学研究は海のプログラム策定に繋げる。

B 2 北九州市における科学的研 究事業—漂流物への這い上がり

○横田哲也、ハート・ウィックストロム、江口洋平、山川仁彦、大庭孝之、宮入寛子、内藤絢佳（日本サバイバルトレーニングセンター）、木村隆彦（赤穂市消防本部）

平成24年8月に、水難学会の科学的研 究として、実海域における研 究事業が福岡県北九州市で開催された。北九州市での実海域開催は初ということで、および関係者は事前調整や準備段階から関与した。今回、現地協力者としての視点を交え紹介すると共に、特に漂流物への這い上がりに関して考察する。

B 3 浮力体への這い上がり技術の策定に向けて

○木村隆彦（赤穂市消防本部）

C1 ランドセルの浮力に関する実証実験

○川越康生、蔵ヶ崎勝啓（福岡着衣泳会）

我々はこれまで着衣泳講習会の際に、「ランドセルは浮具として有効で、教科書等が入っている時の方が浮力が強い」と教えていた。しかし、K市消防本部の「ランドセルは水難事故時に浮具として有効で、中身が空の時の方がよく浮く」とのTVでのコメントを聞き、この浮力に関して実証実験を行うこととした。あわせて、ランドセルを用いた背浮きの状況についても検討した。

C2 スマトラ沖地震津波 最大の被災地『アチェの今』

○安倍 志摩子（朝日海洋開発）